

明治有田偉人博覧会  
明治有田偉人顕彰一覧表

H30.11.20現在

	名前	生年～没年	写真	ひと言説明
1	たしろもんざえもん	1817 (文化14)		幕末期、海外貿易を許可され、「肥磔山信甫造」銘のやきものを製造、販売。長崎のほか、横浜にも支店を出した。町内外にライバルがいる中、碍子の製造にも取り組み、輸出もした。
	田代紋左衛門	～ 1900 (明治33)		
2	たしろすけさく	?		田代紋左衛門の長男。父とともに貿易に携った。有田を訪れた西洋人の接待や宿泊用に明治9年に異人館(旧田代家西洋館)を建設した。白壁土蔵造りの多い当時の有田の中心地に忽然と現れた西洋風の館は、これまで例を見ない建物であった。明治19年ごろには中国市場をめあてにした碍子の製造に取り組んだ。
	田代助作	～ 1890 (明治23)		
3	たしろのぶ	?		田代紋左衛門の妻、手塚家から嫁ぎ家庭と家業を支えた。危篤の折には、母を思う家族が当時高価で入手困難だった氷を函館から取り寄せたという逸話が残っている。
	田代ノブ	～ 1888 (明治21)		
4	ひさとみよじべえまさつね	?		文化年間には絵業を商っていて、次第に財をなした中の原一帯には久富一族が軒を並べていた。屋号「葎春亭」を佐賀藩10代藩主鍋島直正から拝領し、天保12年(1841)にオランダ貿易を再開した。翌年、長崎出嶋に近い一等地に支店を設け、海外輸出の窓口とした。その支店には大隈重信や副島種臣、石丸虎五郎などの佐賀藩士が出入りした。
	久富与次兵衛昌常	～ 1861 (文久元)		
5	ひさとみよへいまさおき	1832 (天保3)		幕末期、佐賀藩から海外貿易を許可された久富家を引き継ぎ、洋式帆走船・大木丸で活躍したが、不運にも志半ばで死去。存命ならば三菱を凌ぐ商社となったであろうと大隈重信が語った豪商であった。
	久富与平昌起	～ 1871 (明治4)		
6	はちだいふかがわえいざえもん	1832 (天保3)		合本組織香蘭社を設立して万博に出展し、貿易に力を入れた明治の開化期の有田皿山のリーダー。国策である電信のための磁器製碍子の製造に成功し、日本の近代化にも貢献した。
	八代深川栄左衛門	～ 1889 (明治22)		
7	きゅうだいたいふかがわえいざえもん	1864 (元治元)		香蘭社社長。明治22年のパリ博にも渡欧した。1896年、有田磁器窯業組合長の田代呈一と発起人になり、陶器市の前身である陶磁器品評会を提唱した。1916年から11年間、有田町長を務める。
	九代深川栄左衛門	～ 1935 (昭和10)		
8	ふかがわせい	?		八代深川栄左衛門の妻であり、九代栄左衛門、忠次兄弟の母。禁裏御用窯の辻家から嫁ぎ、深川家の子どもたちの教育にも力を注いだ。信仰心も厚く、深川家は日蓮宗であったものの、浄土真宗にも深く帰依した。
	深川セイ	～ 1910 (明治43)		
9	ふかがわちゆうじ	1871 (明治4)		八代深川栄左衛門の二男。分家して現在の深川製磁を創業。シカゴ万博、パリ万博に渡航。特に1900年のパリ万博では大花瓶を出品し、金牌を受賞。職人や社員の育成にも力を入れた。
	深川忠次	～ 1934 (昭和9)		
10	じゅういちだいつじかつぞう	1847 (弘化4)		江戸時代から禁裏御用(宮内庁御用達)の名窯元で、明治8年の合本組織香蘭社創立者の一人。その後、精磁会社の設立にも加わる。
	11代辻勝蔵	～ 1929 (昭和4)		
11	てつかかめのすけ	1842 (天保13)		有田焼商人として、明治8年の合本組織香蘭社創立者の一人。明治9年、米國フィラデルフィア万博に参加のため渡米。長男国一は明治19年に渡米し、森村組ニューヨーク支店に入社し活躍。有田で初めてアメリカ人女性と結婚した。
	手塚亀之助(国一) *写真は国一	～ 1900 (明治33)		
12	ふかうみへいざえもん	1812 (文化9)		深海宗伝を祖に持つ泉山の名門窯焼き。明治元年には新たな貿易商の一人となった。墨之助・竹治兄弟の父で、同2年に京都の陶工高橋道八が有田に招聘された折には優れた技で道八を驚かせたが、二人の息子には京焼の技術にも学ぶものは多いと論じた。本窯錦の技法を確立し、製造した焼物には「年木庵喜三」の銘を入れた。
	深海平左衛門	～ 1871 (明治4)		
13	ふかうみすみのすけ	1845 (弘化2)		泉山の窯焼き・深海平左衛門の長男。父の勤めにより西洋絵の具の製造を学ぶ。合本組織香蘭社、精磁会社の製品作りに腕を振るった。1876年のフィラデルフィア万博に参加。その折、展示館にある深海の作品をスケッチしていたセーブルの同業者を一喝して追い払ったとの逸話もある。
	深海墨之助	～ 1886 (明治19)		

	名前	生年～没年	写真	ひと言説明
14	ふかうみたけじ	1849 (嘉永2)		泉山の窯焼き・深海平左衛門の二男。父のもとで本窯錦(釉下彩)の技法を開発し、絵付けのみならず彫刻の技を駆使した製品を手がける。兄の墨之助と共に、合本組織香蘭社、精磁会社の製品作りに腕を振るった。
	深海竹治	1897 (明治30)		
15	かわはらせんのすけ(ぜんぱち)	1835 (天保6)		札の辻近くで酒請(酒造業)を営んでいた川原家は、八代深川栄左衛門とともに柞灰の一手販売を行う。祖父善右衛門は黙齋と号し藪の内流の茶人であり、子孫もみな茶を嗜んだ。善之助は俳句などの文芸にも造形深く中国の易经から取った「君子の交わりは蘭の香りの如し」という香蘭社の名付け親。忠次郎の兄であり、妹ミンは久富与平に嫁ぐ。
	川原善之助(善八)	1889 (明治22)		
16	かわはらちゆうじろう	1849 (嘉永元)		有田初の海外渡航者。酒請の川原家に生まれ、明治6年のウィーン万博に渡欧。伝習生の一人としてヨーロッパの産地で研修し、ギプス(石膏型)や機械ろくろの技術を持ち帰る。
	川原忠次郎	1889 (明治22)		
17	ひらばやしいへい	1841 (天保12)		大樽の窯焼きで、洋食器や碁子の生産に取り組む。有田でいち早くちよんまげを切り落とした。明治22年に初代有田町長に就任。
	平林伊平	1893 (明治26)		
18	まつおとくすけ	1857 (安政4)		岩谷川内の窯焼き。父勝太郎と共に長崎での海外貿易にも取り組み、明治16年(1883)には単身香港に渡り磁器の販売と商況の調査を行った。有田で最初にタイル(敷瓦)を制作、明治35年(1902)の西松浦郡陶磁器品評会でこの敷瓦で二等賞を受賞した。この敷瓦は長崎県佐世保市の黒島に建つ教会の祭壇に使用されている。
	松尾徳助	1926 (大正15)		
19	ふかがわろくすけ	1872 (明治5)		16歳のとき、白川小学校校長の江越礼太の推薦で初代文部大臣・森有礼の書生となる。その後有田に戻り、町議会や県議会の議員を歴任。第19回陶磁器品評会にあわせて蔵ざらえを提唱し、現在の陶器市となっている。有田の町おこしのパイオニア。
	深川六助	1923 (大正12)		
20	なかしまこうき	1871 (明治4)		白川の窯焼きの家に生まれる。陶工としての優れた技量を持っていたが、家業が傾き、その後星製菓の販売店を営みながら、各地に残る古文書を渉猟し、墓碑の苔を洗い落とし、古窯を踏査して陶磁史研究を行った。昭和4年に30年余をかけて集めた膨大な資料をもとに、有田皿山の百科事典といわれる「肥前陶磁史考」の執筆にかかり、昭和11年に出版した。
	中島浩氣	1955 (昭和30)		
21	まともとはいざん	1895 (明治28)		陶芸作家のパイオニア。昭和8年の帝国美術院・美術展覧会に入選、第二次大戦中に「芸術保存者」に選ばれた。生涯を通して中国陶磁器の研究を行い、釉裏紅などの作品を手掛けた。
	松本佩山	1961 (昭和36)		
22	なんりかじゆう	?		白川の窯焼きで、明治を代表する名工でもあった。その彼の技を伝える逸話にはろくろ職人が粗方の形を作らせて、その後やおら嘉十が車坪に入り、コテをあてて二分ほどで完全なる器を作り上げたという。フィラデルフィア万博に出品された花瓶は、胴部が二重構造で丸い窓から中の文様が見える構造になっている特徴的なつくりとなっている。
	南里嘉十	1880 (明治13)		
23	たかすとよじ	1890 (明治23)		東京美術学校日本画科卒業後、大正14年に東京帝室博物館に入り絵画史の研究に従事する。特に古九谷論争にも言及し、多くの示唆を与えている。絵画史、陶磁史に造詣が深く、晩年には陶画も手掛けた。
	鷹巣豊治	1962 (昭和37)		
24	かじはらともたろう	1841 (天保12)		黒牟田の窯焼きで、父菊三郎とともに大皿や大鉢など荒物(大型製品)を得意とした。明治6年のウィーン万博に3尺の大鉢を出展し、ヨーロッパ人を驚かせたといわれている。
	梶原友太郎	1921 (大正10)		
25	たかやなぎかいどう	1824 (文政7)		佐賀久保田出身の南画家。明治の初め、白川に住み、香蘭社で大皿に絵を描くかわら、子どもたちの教育にも力を入れた。力強い筆使いで描かれた作品が残っている。
	高柳快堂	1909 (明治42)		
26	しょうじこうき	1793 (寛政5)		天保3年、佐賀藩主鍋島直正の側近古賀穀堂に自著「儉法富強録」を提出。これが佐賀藩の天保の藩制改革の骨子となった。商人でありながら全国の文人との交流があり、多くの著作をなした。
	正司考祺	1857 (安政4)		

	名前	生年～没年	写真	ひと言説明
27	えごしれいた	1827 (文政10) ～ 1892 (明治25)		元小城藩士で、有田の教育者。明治14年、国内初の陶器工芸学校(勉脩学舎)を設立し、子どもたちの実業教育に尽力。実業教育の草分けであり、有田教育の父。
	江越礼太			
28	のうとみかいじろう	1844 (弘化元) ～ 1918 (大正7)		元小城藩士で、父柴田花守に絵画を学び、号は介堂。明治6年のウィーン万博、同9年のフィラデルフィア万博に参加し、それら出品作の図案に深く関わった。石川・佐賀・香川などの工業学校長を歴任。
	納富介次郎			
29	やまもとりゆうきち	1830 (天保元) ～ 1897 (明治30)		白川の窯焼きで、主に神社などに奉納される磁器製の大燈籠を製作した。また藩主からの注文で製作した際には藩主が直々に工房を訪れ、その入口に掲げられた「御用細工場」の高札が子孫である山本家に所蔵されている。
	山本柳吉			
30	たにぐちらんでん	1822 (文政5) ～ 1902 (明治35)		有田白川生まれの儒学者。父陶溪は血山代官所の役人を勤めた。幼いころから神童と称され、父や叔父の清水龍門(武雄の儒者・兵法家)などに学問を学び、日田の咸宜園で各地の俊才たちと交流を深め、大坂や江戸にも遊学し、佐藤一斎や佐久間象山など多くの知識人や文化人と交流した。嘉永4年に有田白川で家塾「白川書院」を開き、後に宮野村に塾を移し「箕山書院」と名付けたが遠近から多数の塾生が集った。明治2年に鹿島藩主鍋島直彬に招かれ藩校弘文館の教授となる。その後、日本各地を旅し詩や書を残している。
	谷口藍田			
31	まつおかんざぶ	1859 (安政6) ～ 1922 (大正11)		明治26年、西松浦郡初代の代議士となる。明治27年の佐賀県五二会創立にも関わった。財政界でも多くの会社の創立に関わり、明治41年には東京小石川に丘隅舎という西松浦郡出身者の学生寮開設にも尽力した。
	松尾寛三			
32	てらうちしんいち	1863 (文久3) ～ 1945 (昭和20)		山口市出身。明治11年、工部美術学校に入り、イタリア人ラグーザ教授に石材彫刻を学ぶ。明治31年に納富介次郎の招きで有田に移り、製陶家実地斯道にあたった。有田徒弟学校、有田工業学校教諭を経て、同36年有田工業学校長に就任。「有田磁業史」など陶磁器に関する著作も多い。
	寺内信一			
33	まつおぎすけ	1836 (天保7) ～ 1902 (明治35)		元佐賀藩士で、親戚の野中元右衛門に師事し長崎で茶の輸出に取り組んだ。その後、明治6年のウィーン万博に渡欧し、その後、政府の援助を受けて貿易会社の起立工商会社を設立。一時はニューヨーク、パリに支店を設けるほどの隆盛を誇った。
	松尾儀助			
34	さのつねたみ	1822 (文政5) ～ 1902 (明治35)		元佐賀藩士。理化学研究を進め、三重津海軍所の創設や日本で最初の実用蒸気船「凌風丸」を完成させた。慶応3年のパリ万博に出品するため、有田を訪れて1万両の焼物を買上げ、長崎の久富・田代両支店の製品を持って渡仏。明治6年のウィーン万博では副総裁として派遣され、日本の近代化に貢献した。
	佐野常民			
35	おおくましげのぶ	1838 (天保9) ～ 1922 (大正11)		元佐賀藩士。維新後は、新政府で参議、大蔵卿や外務大臣、総理大臣を歴任した。また、教育事業にも尽力し、早稲田大学を創設した。明治29年に有田を訪れ、泉山石場を視察。また大正3年にも有田を再訪し、香蘭社、工業学校、深川製磁などを廻り、有田小学校で町民に向けて有田焼の更なる発展を願って講演を行った。
	大隈重信			
36	くめくにたけ	1839 (天保10) ～ 1931 (昭和6)		父邦郷は血山代官を勤め、その関わりで多くの知人が有田血山にいた。明治4年岩倉全権大使使節団の一員として世界中を視察し、これから国を富ますには一黨元ではなく、大きな会社を作って世界を相手に商売をする、つまり合本組織の香蘭社を提案した
	久米邦武			
37	いしまるやすよ・とらごろう	1839 (天保10) ～ 1902 (明治35)		元佐賀藩士。慶応元年に同僚の馬渡八郎とともに、長崎の貿易商グラバーの手引きでイギリスに渡り、造船や通信など最先端の技術を学ぶ。帰国後は、伊万里山代で江越礼太と共に経緯舎という塾を開いた。石丸の言葉で「これからは白と黒の時代だ」というのは白は陶磁器、黒は石炭を意味した。その後、新政府で工部省の初代電信頭となる。電線の架設に必要な碍子を粗悪な外国品から国産に替えるため八代深川左衛門に磁器碍子の製造を依頼し国産化に成功、国の電信事業を推進した。
	石丸安世			
38	まえだまさな	1850 (嘉永3) ～ 1921 (大正10)		元薩摩藩士。明治2年から8年間フランスに留学し、帰国後は明治政府の要職を歴任する。明治27年に農商務省次官を辞任し、同年に殖産興業のため全国組織の「五二会(織物、陶磁器、漆器、金属器、製紙、彫刻、数物)」を組織し、佐賀でも創設される。明治29年に「有田五二会陶磁器品評会」が開催され、現在の有田国際陶磁展として今日に至る。
	前田正名			
39	なかばやしごちく	1827 (文政10) ～ 1913 (大正2)		元小城藩士。江越礼太とは縁戚関係であり、長子は有田の江越の塾生でもあった。有田に何度となく訪れて、その書が多く残されている。
	中林梧竹			

	名前	生年～没年	写真	ひと言説明
40	ごっどふりーど・わぐねる	1831 (天保2) ～ 1892 (明治25)		ドイツ人化学者。明治3年、佐賀藩に雇われ有田へ。石炭窯やコバルト、西洋絵具の導入など、有田焼業界近代化のためのいくつかの技術を伝授。明治22年に再び来町したときには日本語で演説を行った。
	ゴッドフリード・ワグネル			
41	あーさー・ふれんち	生年没年不明		アメリカ・ボストンの貿易商。明治14年、来日していたフレンチを手塚亀之助が有田に招き、約40日間滞在している。この折、精磁会社の洋食器製造方法について指導を行い、約170種類のサンプルを製作した。このとき、亀之助の長男・国一が世話係を務めており、後年の渡米のきっかけとなった。
	アーサー・フレンチ			
42	ぐいど・ふるべっき	1830 (天保元) ～ 1898 (明治31)		オランダ出身でアメリカに移民した宣教師。安政6年(1859)に宣教の活動のため長崎に來日。その後、石丸の案内で佐賀藩領内を巡り、有田へも足を運んでいる。佐賀藩の学校致遠館で藩士の大隈重信や副島種臣、石丸安世らに英語の講義を行った。彼らに提示したブリーフ・スケッチは後に岩倉全権大使らの欧米使節団の見聞に役立つといわれている。
	ガイド・フルベッキ			
43	ありすがわのみやたるひと	1835 (天保6) ～ 1895 (明治28)		明治20年の大晦日に深川家(香蘭社)を訪れ宿泊。翌元旦に「琴酒相壽」の書を残している。また、「勉脩学舎」の扁額も有田に残し、現在この書は有田工業高校に残る。
	有栖川宮熾仁			
44	さいごうつくみち	1843 (天保14) ～ 1902 (明治35)		西郷隆盛の弟。明治20年8月、海軍大臣であった西郷は有田を訪れ、泉山石場を視察の折にはそこで相撲が催され、その夜は白川の勉脩学舎で歓迎会が行われ、深川家に一泊した。
	西郷従道			
45	なべしまなおひろ	1846 (弘化3) ～ 1921 (大正10)		佐賀藩最後の藩主。廃藩時の藩主でもあったが、殖産を奨め、西松浦郡に石炭を採掘し、百武郡令をして有田の陶磁器製造を奨励し内外の輸出を試みた。明治20年2月、有田を訪れ石場を視察後、深川家に一泊した。
	鍋島直大			
46	もりありのり	1847 (弘化4) ～ 1889 (明治22)		元薩摩藩士。藩命あるいは自ら海外へ渡航し、帰国後は新政府に出仕。明治18年初代文部大臣に就任し、明治20年に有田を訪れ有田小学校を視察した。その折、江越礼太校長の推薦を受けた深川六助が上京し、森家の書生になって寄宿した。
	森有礼			
47	しゅぎょうひろみち	1853 (嘉永6) ～ 1927 (昭和2)		元佐賀藩士。藩校弘道館を経て、佐賀藩の貢進生に選ばれ上京。その後アメリカ留学後、外務省を経て明治13年起立工商会社に招かれ、ニューヨーク支店長を務めた。明治14年にアメリカ陶磁器商人アーサーフレンチが有田に滞在し製陶技術を指導した際には、佐賀市からフレンチの食事用に食材を運んだという。
	執行弘道			
48	えぞえまごえもん	1885 (明治18) ～ 1964 (昭和39)		明治37年に県立有田工業学校卒業、同42年に東京高等工業学校を卒業したが、父八蔵の薫がつぶれ日本陶器に入社する。その後、日本特殊陶業社長、日本碍子社長など歴任し、いわゆる森村組系関連会社で重きをなした。昭和22年、公選法施行後最初の有田町長に就任したが、同24年に東洋陶器(現TOTO)再建のため社長として復帰し町長は辞任。在職中に有田町を襲った大水害(23水)では復興の陣頭指揮を執った。有田町名誉町民第1号。
	江副孫右衛門			
49	ひゃくたけさくえもん(さくじゅう)	1820 (文政3) ～ 1892 (明治25)		元佐賀藩士で有田皿山の最後の代官。父は名代官といわれた成松信久。明治2年の版籍奉還により皿山郡令に任命される。同3年に伊万里商社の設立、ドイツ人化学者ワグネルを有田へ招くなど変革期に於いて有田の発展に大きく貢献したが、過干渉な面もあり、「百武雀が飛んで来て有田伊万里を啼き荒らす」と揶揄された。
	百武作右衛門(作十)			